サオ語（台湾中部）の語順

新居田　純野

Word Order in the Thao Language of Taiwan

NIIDA Sumino

Abstract

This paper is the result of research on word order in the Thao language. Thao is the language of the native Thao people residing in Taiwan's central region, a language which belongs to the Austronesian family of languages.

In 2001 the Thao people were officially recognized by the Taiwanese government as the 'tenth aboriginal people' of Taiwan. Their traditional language, with drastically few speakers, is one of the languages on the verge of extinction, the so-called 'Endangered languages'.

However, the language spoken on a daily basis by younger generations is Taiwanese (Min-nan), or Chinese (Mandarin). Those who can speak the Thao language on a daily basis without difficulty are mostly over 60 years old.

I analyzed the word order of the Thao Language in 19 items by using legend storise and many investigation examples. I clarified all the word order in the Thao language for the first time.

1．はじめに

台湾中部の日月潭周辺に住むサオ族[1]によって話されるサオ語[2]はオーストロネシア語族に属する。サオ族の被調査者の多くは、サオ語のほかに台湾語を話すが、なかには、ブヌン語や中国語や日本語を話す人もいる。これは、日常的にサオ語を話す高齢者たちが、早くから漢民族と接触していたこと、日本統治時代に日本語教育を受けたこと、サオ族は昔からブヌン族との交流が多く婚姻関係を結ぶ人が多いことなどの理由からである。特に、これまでのサオ語の調査の被調査者となっているキラ

---

[1] 2001 年に台湾の行政院によって公式に認知された「第十番目の原住民」である。サオ族の人口は現在約 600 人である。日常生活に使用する言語は、主に台湾語と中国語であり、サオ語を話せる人は 60 代以上の少数の人たちである。現在ではサオ族同士の会話の中に時々サオ語が使用される程度である。

[2] 子音は /p/, /b/, /m/, /f/, /t/, /d/, /n/, / /c/(/th/)[θ], /s/, /z/ [ð], /lh/[ɬ], /l/, /r/, /sh/[ʃ], /k/, /ng/(/g/)[ŋ], /q/, / ′ /[glottal stop] , /h/, /y/, /w/ で、母音は /a,u,i/ の三つだが、/i/ は /q,r/ と連続するとき [e][æ][ɛ] などに、/u/ は /q,r,ng/ と連続するとき [o] となる。/b, d/ の前と、語頭・語尾の母音は glottal stop が現れるが、本稿では、表記を省略した。本稿で使用する略記号は以下の通りである。AF actor focus（シテ焦点）; CAUS causative（使役）; LF locative focus（バショ焦点）; PF patient focus（ウケテ焦点）; PST past（過去）; RED reduplication（繰り返し）; NEG negative（否定）; 1 1 人称 ; 2 2 人称 ; 完 完了接辞 ; 起 起動接辞 ; 主 主格 ; 助 助辞 ; 状 状態接辞 ; 接 接続詞 ; 属 属格 ; 存 存在動詞 ; 対 対格 ; 単 単数 ; 場 場所接辞 ; 移 移動接辞 ; 非 非実現 ; 複 複数 ; excl. 非包括形 ; incl. 包括形 ; 未 未来接辞 ; 連 連結詞。Blust（2003）など先行研究からの引用用例に関しては、本稿ではすべて筆者の表記に統一してある。

シ氏、プニ氏は台湾語、日本語のどちらも堪能である。そして、これまでの多くの調査が、媒介語として台湾語や日本語を介してなされてきたため、調査による一文対応で発話してもらうサオ語の用例には、台湾語や日本語の影響を受けているとも考えられる。そのため、本稿では、筆者による調査および1950年代から現在に至るまでの先行研究中に記録されているサオ族の伝承物語を資料[3]として、サオ語における語順の特徴を調べ、日本語、中国語、台湾語、英語[4]との対照もあわせておこなった。

2．語順に関する先行研究

ここで用いるS、O、Vは、主語（subject）をS、目的語（object）をO、動詞（verb）をVと略したものである。他動詞文において、主語Sは動作者あるいはその類を、目的語Oは動作の対象あるいはその類をさす語句であり、動詞Vは述語である。他動詞文の三つの成分であるS、O、Vの配列は、SOV、SVO、VSO、VOS、OVS、OSVが考えられるのであるが、最も多いとされる語順は日本語、ラテン語などのSOV型で世界の言語の中で約半数を占めている。次に多いとされるのは、英語、中国語などのSVO型で30%前後である。三番目は、ヘブライ語などのVSO型である。残りのVOS型、OVS型、OSV型の語順は、SOV型、SVO型、VSO型に比べて少数である。世界の言語の中で多数を占める語順（SOV型、SVO型、VSO型）の特徴は、主語が目的語に先行するということである。世界の言語の80％以上がSOV型という語順のタイプか、SVO型の語順のタイプに分かれることになる。柴谷（1981:50）では、前者をOV言語、後者をVO言語と名づけ、他の語順現象においても体系的な対立を示す傾向があるとしている。しかし、角田（1991）は、日本語（SOV型）とタイ語、英語（SVO型）の語順比較を行い、語順に必ずしも規則性があるとは言い難いとしている。

多くの言語では、語順によってそれらの文法的関係を示している。そのなかでも、中国語は、その語に文法的標識をもたない言語であるため、ある程度は語順によらざるをえない言語であるが、まったく語順に自由がないというわけではない。また、葛西（2008）によると、英語はその語の「文の中での位置」、つまり語順でその語の機能を示し、動詞の前にあるから主語、後ろにあるから目的語となる、のである。

角田（1991:3-28）では、SOV型の日本語、SVO型の英語とタイ語を語順の観点から以下のような19の項目について比較している。

①主語、目的語と動詞、②側置詞と名詞、③所有格と名詞、④指示詞と名詞、⑤数詞と名詞、
⑥形容詞と名詞、⑦関係節と名詞、⑧固有名詞と普通名詞、⑨比較の基準と比較の印と形容詞、
⑩本動詞と助動詞、⑪副詞と動詞、⑫副詞と形容詞、⑬疑問の印、⑭一般疑問文での倒置、
⑮疑問詞、⑯特殊疑問文での倒置、⑰否定の印、⑱条件節と主節、⑲目的節と主節

本稿では、この19項目において、サオ語ではどのような語順をとるかをみていくことにする。

---

[3] 特に、主語、目的語、動詞の語順に関しては、サオ語本来の自然な発話による用例を分析対象とするため、先行研究に記録されているサオ族の伝承物語を資料とした。他の語順に関しては、筆者自身が2003年1月から2008年9月にかけて日月潭徳化社でおこなった調査によって得られたサオ語話者の発話用例も分析対象としている。

[4] 英語に関しては、角田（1991:3-28）を参考とした。

３．サオ語の語順

①主語、目的語、動詞

サオ語では焦点体系を持っており、動詞の表す行為の行為者（actor －多くは主語に相当する）、受益者（benefactive －多くは目的語に相当する）などに焦点をあてることによって、動詞につく接辞が変化する。したがって、厳密に言えば、S（主語）、O（目的語）ではなく、シテ、ウケテ、動詞ということになるのだが、他の言語と比較しやすいように、S、V、O で表記する。

日本語では、SOV 型となって、動詞が文末に来る。ただし、話し言葉では主語や目的語が動詞の後ろに来ることもある。台湾語、中国語、英語は SVO 型であるが、サオ語は、もともとは VSO 型であったが、台湾語、中国語等の影響を受け、現在では SVO 型の発話も多くみられるようになったといわれている。

Blust（2003:216）には、台湾語の影響を受けてしばしば SVO 型になるが、物語を語ったり、個人的な会話のときに VSO 型も発話され、キラシ氏によればどちらも正しいが、VSO 型のほうがよりよい、とある。黄（2000:69-76）では、サオ語は、もともとは VSO 型であったが、現在では、SVO 型になったとし、また、動作主体者やその動作を受けるものが明らかな場合は、語順は自由である、としている。つまり、人称代名詞の主格や対格の場合（1）と、動作主体者が有情物（キラシ）でその動作を受けるものが非情物（帽子）の場合（2）は、(1)’(2)’のように S と O をいれかえることもできるとしている。（本稿で引用する用例のグロス、表記は一部筆者が修正している。また、日本語訳は筆者による。）

（1）kilash　p-alhay　yakin（黄 2000:74）
　キラシ　殴る -CAUS　１単対
　キラシは私を殴る。

（1）’yakin　p-alhay　kilash（黄 2000:74）
　１単対　殴る -CAUS　キラシ
　キラシは私を殴る。

（2）kilash　tamuhun-in　mihu　wa　tamuhun（黄 2000:74）
　キラシ　かぶる -PF　２単属　連　帽子
　キラシはあなたの帽子をかぶる。

（2）’mihu　wa　tamuhun　tamuhun-in　kilash（黄 2000:74）
　２単属　連　帽子　かぶる -PF　キラシ
　キラシはあなたの帽子をかぶる。

表１は、資料とした伝承物語において、目的語が明記されている他動詞文のとる語順における用例数である。本稿で扱った伝承物語からだけでは、サオ語の本来の語順が VSO であるかどうかは特定できない。1995 年以降の資料では、SVO 型であるものが圧倒的に多い。

このほかに、本稿では、自動詞文についても調査を行った。表２のように、自動詞文では、日本語、台湾語、中国語、英語のすべての言語では SV 型となるが、サオ語では、SV 型がいくぶん多いが、語順は比較的自由だといえるだろう。時（夜中）(3) や場所（山）(4) を表す語が共起する場合 VS 型になる傾向がみられた。

（3）numa　tu　mintanafazfaz　sa　qali　minpulhiz　sa　mashitantuqash.（C170[5]）
　接　助　夜中　助　日　目が覚める　助　年長者

[5] C170 は資料 C で、番号は掲載ページ

そして、夜中に年長者は目が覚めた。

(4) numa　sa　puzi　ya　hudun　dawqraw-an　yamin　(C189)

接　助　白い　連　山　溝を作る -LF　1 複 excl.

私たちは白山に溝を作った。

表 1　他動詞文の語順

資料記号	調査年	被調査者（生まれ年）	資料用例数	VSO	SVO	(S の省略) VO
A	1955	šawi（1905?))	34	0	1	8
B	1987	Puni（1925) Apin（1917)	11 12	1 0	2 2	1 8
C	1995	Kilash（1923)	202	3	53	6
D	1995-1998	Kilash（1923)	105	1	32	5
	計		364	5	90	28

〈資料記号〉A: 国立台湾大学考古学人類学刊編輯委員会編輯（1958）『日月潭邵族調査報告』国立台湾大学考古人類学専刊第一種 pp.169　B: 土田滋（1987）調査資料（未公表）　C:『台湾原住民史 - 語言篇 -』（1999）台湾省文献委員会編　D:Blust, Robert（2003）*Thao Dictionary*. Taiwan: Institute of Linguistics Academia Sinica.

表 2　自動詞文の語順

資料記号	調査年	被調査者（生まれ年）	資料用例数	VS	SV
A	1955	šawi（1905?))	34	6	13
B	1987	Puni（1925) Apin（1917)	11 12	4 0	9 0
C	1995	Kilash（1923)	202	6	10
D	1995-1998	Kilash（1923)	105	3	6
	計		364	19	38

② 側置詞と名詞

側置詞の代表的なものには前置詞と後置詞があるが、サオ語では、「ti ＋名前」、「sa（s）＋名詞」「tu ＋名詞」「i- 場所」のように、名詞の前に来る。ただし、現段階では、名詞の前におかれる「ti, sa, s, tu」などの文法的機能についてはまだ明らかになっていない。日本語では「ここ・に」のように名詞の後に来る。英語では基本的には名詞の前に来る。台湾語、中国語も「在・日本（日本で / に)」のようになって名詞の前に来る。

③ 所有格と名詞

サオ語の格形式は以下のようになる。

表３　人称代名詞と格形式（Blust2000:207- 日本語訳は筆者）

	主格	対格	属格（所有格）
一人称単数	yaku	yakin	nak
二人称単数	ihu	ihu-n	m-ihu
三人称単数	cicu	cicu-n	cicu
包括的（incl.）一人称複数	ita	ita-n	m-ita
除外的（excl.）一人称複数	yamin	yamin	yamin
二人称複数	maniun	maniun	maniun
三人称複数	caycuy	caycuy	caycuy

サオ語では、次のように属格（所有格 - 所有者）と名詞（所有物）の間に、連結辞[6]「a」がはいる。

(5) nak　　a　　tamuhun
　　1 単属　連　　帽子　　私の帽子

(6) mihu　　a　　patashan
　　2 単属　連　　本　　あなたの本

ただし、所有者が固有名詞の場合は「所有者（絶対格）＋連結辞＋所有物」となる。

(7) Kilash　　a　　tamuhun
　　キラシ　連　帽子　　キラシの帽子

日本語では、「わたしの帽子」のように「名詞＋の」で所有者を表し、所有物がその後に来る。中国語、台湾語では所有者と所有物は構造助詞の「的」が結びつける。英語では、所有格を用いる場合（Mary’s house）と of を用いる場合（the house of Mary）がある。

④ 指示詞と名詞

サオ語では、指示詞は名詞の前に来て、連結辞によって結ばれる。

(8) huya　wa　patashan
　　それ　連　本　　その本

(9) izay　　a　　qalhum
　　それ　連　ありくい　　そのありくい

台湾語、中国語、日本語、英語も指示詞は名詞の前に来る。

⑤ 数詞と名詞

サオ語では、数詞は名詞の前に来て、その間に連結辞が介入する。

(10) tata　wa　qali
　　一　連　日　　一日

(11) tusha　wa　furaz
　　二　連　月　　二番目の月（二月）

[6] 連結辞は名詞と名詞、形容詞と名詞、数詞と名詞など、二語をつなぐ役目をする。

台湾語、中国語、日本語、英語も名詞の前に数詞が来る。

⑥ 形容詞と名詞

形容詞はどれも名詞の前に来る。サオ語では形容詞と名詞の間に連結辞が介入する。

（12）ma-ra' in　a　ayuzi
　大きい - 状　連　男　　大きな男

（13）ma-qitan　a　qali
　よい - 状　連　日　　いい天気

⑦ 関係節と名詞

日本語では、関係節は名詞の前に来るが、サオ語、台湾語、中国語では、名詞の前後どちらも可能である。英語では、名詞の後ろに来る。関係節は名詞の前に来て説明する例（14）と、（15）のように後ろから説明する例がある。

（14）yaku　shi-tusi　taipak　qusazin　mani　cuini.
　1 単主　行った -PST　台北　雨が降る -PF　また　今日
　私が昨日行った台北は今日も雨だ。

（15）yaku miarain　m-angqtu nak　a　azazak　i-tusi　Taipak sh-m-upish patashan
　1 単主　いつも　思う -AF　1 単属　連　子ども　場 - あそこ　台北　学ぶ -AF　本
　私はいつも台北で勉強している私の子供のことを思い出す。

台湾語、中国語では、関係節＋名詞は「我買的書」、名詞＋関係節は「書是我買的」のようになる。（わたしが買った本）

⑧ 固有名詞と普通名詞

日本語、中国語、台湾語では、「湯姆叔叔：トムおじさん」のように固有名詞＋普通名詞の順になるが、サオ語では、普通名詞が固有名詞の前に来る。また、連結辞が介入することもある。英語はどちらも可能である。

（16）ama kilash
　父　キラシ　　キラシおじさん

（17）Zintun a wazakan
　地名　連　海　　日月潭

⑨ 比較の表現

サオ語では、「形容詞＋比較の印 ma/mas/mat ＋比較の基準」となり、英語と同じ語順となる。

（18）nak　a　azazak　ma-rutaw　ma　yakin
　1 単属　連　子ども　高い　より　1 単対
　わたしの子どもはわたしより背が高い。
　(My son is higher than me.)

(19) yaku　su　ma-rutaw ma　ti　cicu.
　1 単対　助　高い　より　助　3 単主
　わたしは彼よりも高い。

日本語では、「比較の基準＋比較の印＋形容詞」となり、台湾語、中国語では、「比你高　あなたより高い」のように「比較の印＋比較の基準＋形容詞」となる。

⑩ 本動詞と助動詞

日本語では本動詞が助動詞より前に来るが、サオ語では、助動詞[7]が先行する。

(20) yaku　shdu　ma-rmuz　ma-ruqruq
　1 単主　可能　もぐる -AF　深い - 状
　私は深くもぐることができる。

ただし、未来や過去を表すのは、接辞による。

(21) simaq　a-ma-qusaz　painan
　明日　雨が降る - 未来（a-ma-）　たぶん
　明日たぶん雨が降るでしょう。

(22) yaku　ma-ura　m-rauz
　1 単主　NEG 可能　泳ぐ
　私は泳げない。

中国語、台湾語も、「他好像要去」（彼は行くようだ）のように「助動詞＋本動詞」となる。

⑪ 副詞と動詞

日本語、サオ語では、副詞は動詞よりも前に来る。台湾語、中国語、英語ではかなり自由である。

(23) yaku　ma-fazaq　ma-biskaw　m-alalia
　1 単主　わかる -AF　速く - 状　走る -AF
　私は速く走れる。

(24) tanlhuan　matig-qaran　maqa-quyash　ya　ma-humhum　iza.
　今夜　楽しく　歌う -AF　もし　暗い - 状　すでに
　今夜は楽しく歌いましょう。

⑫ 副詞と形容詞

サオ語も、ここで取り上げたその他の言語も、副詞は形容詞の前に来る。

(25) haya　wa　sazum ma-cuaw　ma-tata.
　この　連　水　とても - 状　熱い - 状
　この水はとても熱い。

⑬ 一般疑問文（英語で yes/no 疑問文と呼ばれている疑問文）での疑問の印

サオ語では、平叙文の文末が上昇イントネーションになる。または、疑問の印「ka」を文末におく。「ka」

[7] ここで助動詞という品詞名を使用しているが、サオ語において、助動詞という品詞を独立した品詞として認められるかどうかは、今後のさらなる研究で明らかにしなければならない課題である。副詞、形容詞といった品詞に関しても同様である。

は不確かなことにつく感嘆詞であるが、不確かなことを表すことから疑問の印に用いられるようになったとも考えられる。

(26) mihu　ka ?
　2 単属　疑問詞
　あなたのか？

日本語では、文末に来る疑問の印は「か」である。台湾語では、文頭に「甘唔」か、あるいは、文末に「唔 / 呢」をおく。

甘唔去？　行きましたか。
要去唔？　行きますか。

⑭ 一般疑問文での倒置

サオ語、日本語、台湾語、中国語とも倒置は起こらないが、英語では主語と動詞が倒置される。

⑮ 疑問詞

numa（何）、manu（誰）、kaiza（いつ）、i-ntua（どこ）など疑問詞は文頭に置かれることが多いが、比較的自由である。日本語、中国語、台湾語では、疑問詞は一般に平叙文と同じ位置に現れる。英語では一般に文頭である。

(27) kaiza　ihu　mati-na-nay ?
　いつ　2 単主　引っ越す -RED-AF
　いつあなたはここに引っ越しましたか。

⑯ 特殊疑問文（英語では WH 疑問文と呼ばれている）における主語と動詞の倒置

サオ語、日本語、台湾語、中国語とも倒置は起こらない。英語では、疑問詞が主語である以外は主語と動詞が倒置される。

⑰ 否定の印

サオ語では、否定詞「ata、ani、antu、uka」がある。ata は命令の否定で、動詞の前に来る。ani は文頭に来ることが多く、文全体を否定する。antu は動詞、形容詞、名詞の前に来る。uka は名詞の前に置かれて、その存在を否定する。

(28) ata　tu　i-lhungqu-i　sa　i-zay　a　pangka!
　IMP・NEG　助　場 - 座る -IMP　助　場 - そこ　連　椅子
　そこのいすに座るな！

(29) ani　haya　wa　rusaw　ma-ra'in
　NEG　この　連　魚　大きい - 状
　この魚は大きくない。

(30) tilha　yaku　antu　m-in-atipish　ihun
　昨日　1 単主　NEG　ぶつかる - AF-PST　2 単対
　昨日、私はあなたにぶつからなかった。

(31) nak　a　binanau'az　antu　la-ma-qitan
　1.単.属　連　女（娘）　NEG　形容詞の程度を表す接辞（とても）- 状 - きれい
　私の娘はあまりきれいではない。
(32) haya　antu　patashan
　これ　NEG　本
　これは本ではない。
(33)　zintun　uka　sa　rusaw
　日月潭　NEG　助　魚
　日月潭には魚がいない。

⑱ 条件節と主節

日本語では、条件節は主節に先行するが、台湾語、中国語、英語は主節、条件節の語順は自由である。ただし、サオ語では、S と V の間に挟まれる場合（34）（35）と、文頭に来る場合（36）がある。

(34) yaku　ya　qusaz-in　ani　(yaku)　a-musha
　1 単主　もし　雨が降る -PF　NEG　1 単主　行く - 非
　もし雨が降れば行かない。
(35) ihu　ya　utusi　Abish　a　taun　panatusi Qariawan
　2 単主　もし　そこへ行く　アビッシュ　連　家　行く　埔里
　埔里に着いたらアビッシュの家に行ってください。
(36) ya　ma-shimzaw iza　maka-bukay　iza　sa　bukay
　もし　寒い - 状　すでに　花が咲く -AF　すでに　助　花
　寒くなれば花が咲く。
(37) yaku　ani　a-mun-tunuq　ya　a-paqit.
　1 単主　NEG　倒れる - 非 -AF　もし　斧 - 非
　もしも斧を使ったら、私は倒れない。

⑲ 目的節と主節

日本語は目的節が主節に先行するが、サオ語、台湾語、中国語では、条件節と同様、語順は自由である。英語では、目的節が主節に後行する場合が多い。

(38) Ali　ya　simaq　a-mu-tusi　Qariwan　fariw　aniamin.
　アリ　もし　明日　そこへ行く - 非 -AF　埔里　買う　物
　アリは明日埔里へ買い物に行く。
(39) yaku　a-ma-kalawa-n　taun　pin-shiusu　sa　tuali.
　1 単主　作る - 非 -AF　家　貯める -CAUS　助　金
　将来自分の家を建てるために、貯金している。

4．おわりに

以上、19 の項目について、日本語、台湾語、中国語と比較しながら、サオ語の語順を中心にみてきた。これらをまとめると表４のようになる。

表４より、サオ語が他の言語と違いがみられるのは、8. 固有名詞と普通名詞、9. 比較の表現、17. 否定である。8. 固有名詞と普通名詞は、英語を除く他の言語では固有名詞が普通名詞に先行するのに対し、サオ語では、普通名詞が固有名詞に先行する。また、9. 比較の表現では、サオ語では形容詞が先行する点が英語を除く他の言語と大きく異なる。17. 否定では、サオ語には様々な否定を表す否定詞があるが、動詞や形容詞の前に置かれる点は、台湾語や中国語と共通である。

また、以上の 19 項目のサオ語の語順の中でゆれが見られるのは、1. 主語、目的語、動詞、7. 関係節と名詞、18. 条件節と主節、19. 目的節と主節である。これらは、今回の調査では、語順がかなり自由であると分析したが、1. 主語、目的語、動詞以外は、さらなる調査が必要だと思われる。

表４　サオ語、台湾語、中国語、日本語の語順

番号	語順	サオ語	台湾語	中国語	日本語	英語
1	主語（シテ）、 目的語（ウケテ）、動詞	SVO、VSO	SVO	SVO	SOV	SVO
2	名詞と側置詞	前置詞＋名詞	＋	自由	－	＋
3	所有格と名詞 （所有者＋所有物）	所有者＋所有物	＋	＋	＋	＋ of
4	指示詞と名詞	指示詞＋名詞	＋	＋	＋	＋
5	数詞と名詞	数詞＋名詞	＋	＋	＋	＋
6	形容詞と名詞	形容詞＋名詞	＋	＋	＋	＋
7	関係節と名詞	自由	＋	＋	関＋名	名＋関
8	固有名詞と普通名詞	普通名詞＋固有名詞	－	－	－	＋
9	比較の表現	形容詞＋比較の印＋ 比較の基準	比較の印＋ 基準＋形	比較の印＋ 基準＋形	基準＋比較 の印＋形	＋
10	本動詞と助動詞	助動詞＋本動詞	＋	＋	－	＋
11	副詞と動詞	自由	自由	自由	副詞＋動詞	自由
12	副詞と形容詞	副詞＋形容詞	＋	＋	＋	＋
13	疑問の印	文末	文頭、文末	＋	＋	無
14	一般疑問文での S,V 倒置	無	＋	＋	＋	－
15	疑問詞	様々	＋	＋	平叙文式	文頭
16	特殊疑問文での S,V 倒置	無	＋	＋	＋	－
17	否定の印	動詞の前	＋	＋	動詞語尾	動詞の直後
18	条件節と主節	自由	＋	＋	条＋主	＋
19	目的節と主節	自由	＋	＋	目＋主	主＋目

＊ ＋はサオ語と同じ語順、－はサオ語と異なる語順

＊ 台湾語、中国語は台湾大葉大学講師杜岱玲氏からの私信による。

サオ語がSVO型か、VSO型かに関しては、自然な発話から分析したいと考え、翻訳法による発話ではない語りによる伝承物語を分析対象としたのであるが、先行研究で述べられているような、もともとはVSO型であったという実証はつかめなかった。

筆者の調査では、一文ずつ、日本語で言ってはサオ語に翻訳してもらうという調査方法をとっているため、サオ語話者が日本語の語順に合わせて発話している可能性もあると思われる。しかし、それでも、この形での調査で得られた用例にも、VSO型の発話が見られるし、被調査者はSVO型でもVSO型でも同じだが、VSO型のほうがより自然だと注釈する場合もある。とすれば、今回、1. 主語、目的語、動詞の語順について、サオ語の伝承物語を資料としているのだが、これらの資料の中にSVO型発話が多いことから、サオ語の語順は、日常会話に使われている台湾語の影響を受けていると考えることも可能かもしれない。

本稿では、これまでの調査で得られた用例および先行研究における伝承物語の記録からサオ語の語順について明らかにした。しかし、被調査者の日常の使用言語がサオ語の語順にどのような影響を及ぼしているのか、サオ族を取り巻く様々な環境の変化がサオ語の語順に何らかの影響を及ぼしたのか、などについて考察をするにはいたらなかった。

今後、まだ書き起こせずにいる被調査者による伝承物語が筆者のもとには多数あるが、それらを書き起こして、サオ語の語順に関してさらなる研究を進めていきたいと考えている。

【参考文献】

Blust, Robert（2003）Thao Dictionary. Taiwan: Institute of Linguistics Academia Sinica.

Comrie,B. (1981) Language universals and linguistic typology. Oxford:Basil Blackwell.

Greenberg,J.H. (1963) Some universals of grammar with particular reference to the order of meanimgful elements. In J.H. Greenberg（ed.）Universals of language, 73-113. Cambridge,MA:MIT Press

Mallinson,G. and B.J.Blake.(1981) language Typology. Amsterdam: North Holland.

Tsunoda, T.(1988) Typological study of word order in languages of the Pacific region（1）名大環太平洋問題研究会（編）、環太平洋問題研究、pp.23-27 名大出版会

葛西 清蔵（2008）「英語の語順変更について」On word-order changes in English Culture and language『札幌大学外国語学部紀要 文化と言語』No.68 pp. 1-27 札幌大学

国立台湾大学考古学人類学刊編輯委員会編輯（1958）『日月潭邵族調査報告』国立台湾大学考古人類学専刊第一種

児玉徳美（1987）『語順の普遍性』山口書店

佐伯哲夫（1998）『要説　日本文の語順』くろしお出版

柴谷方良（1981）「日本語は特異な言語か？」『言語』Vol.10、No.12、pp.46-58

角田太作（1983）「言語類型論」『新ことば学入門・８』言語生活 383、pp.64-79

角田太作（1988）「類型論」林栄一 , 小泉保（編）『言語学の源流』勁草書房、pp.282-94

角田太作（1991）『世界の言語と日本語』くろしお出版

土田滋（1987）調査資料（未公表）

台湾省文献委員会編（1999）『台湾原住民史 - 語言篇 -』

安部清哉･新居田純野共編著（2007）『石阿松氏『サオ語語彙 4000』――仮名が記録した太平洋の“危

機言語”――』学習院大学東洋文化研究所調査研究報告 53）
安部清哉・土田滋・新居田純野（2008）「アタヤル語（泰雅語）の寒溪方言に入った日本語」『東洋文化研究』10（研究ノート）、pp.29-63、学習院大学東洋文化研究所
安部清哉・長嶋善郎・新居田純野（編）、土田滋（監修）（2008）『サオ語（台湾･邵語）語彙（英語･日本語索引付）サオ語研究資料 Ⅱ』学習院大学東洋文化研究所調査研究報告 54
新居田純野（2005）「存在動詞における「遠 / 近」「可視 / 不可視」- オーストロネシア語（サオ語）の場合 -」『国文学解釈と鑑賞』1 月号　至文堂、pp.164-173
新居田純野（2007）「サオ語における evidentiality（証拠性）とアスペクト」『大葉大学応用日語学報』第 1 号、pp. 136-155
新居田純野（2007）「サオ語（台湾中部）の否定表現」学習院東洋文化研究所『東洋文化研究』第 9 号、pp.1-25
新居田純野（2007）「サオ語の兼語構造について」学習院大学東洋文化研究所調査研究報告 53、pp.345-350
新居田純野（2007）「サオ語（台湾）における焦点接辞と二項述語階層」『他動性の通言語的研究』くろしお出版、pp.66-78
新居田純野（2008）「日本語との対照におけるサオ語の時間表現－テンス･アスペクト－」『対照言語学研究』第 17 号、pp.21-49
新居田純野（2008）「日本語との対照におけるサオ語の授受表現」『東洋文化研究』第 10 号学習院東洋文化研究所、pp.1-27
新居田純野（2008）「サオ語（台湾）における現場指示表現－日本語との対照から－」『人文』第 6 号学習院大学人文科学研究所、pp.213-231
新居田純野（2008）「日本語との対照におけるサオ語の可能表現」『大葉大学応用日語学報』 2 号、pp.197-223
松本克己（1987）「日本語の類型論的位置づけ」『言語』創刊 15 周年記念別冊（1987 年 6 月）、pp.42-52

niida@tc.nagasaki-gaigo.ac.jp